

寄せ場学会通信

2 1987年12月

連絡先
167 東京都杉並区善福寺2-6-1
東京女子大学松沢研究室気付
電話 03-395-1211

流動する下層労働者

遅れてゴメンの第2号



11・1シンポジウム報告

アジア全体の視野 から差別の本質を つかむ

去る11月1日、大阪菅原橋の「部落解放センター」において、「流動する下層労働者——その現状と未来」というテーマで日本寄せ場学会第一回シンポジウムがひらかれました(参加者約90名)。

まず始めに、司会の杉村昌昭さん(大阪女子大学)から開会宣言がなされ、ついで本学会運営委員長の池田浩士(京都大学)さんから、学会成立の経緯の報告がなされ、さらに、従来の寄せ場研究の問題点が指摘されました。そこでは、いままでの研究が「対象」を単純に素材や材料として扱い、生きかつ生活している寄せ場の労働者そのものを見ていなかったのではないかと。寄せ場学会に問われているのは、「現実と「研究」とをどのように対応させるかであり、単に現実を「理解」する研究ではなく現実を「変革していく」研究でなければならない」と提起されました。

つぎに、事務局から、事務上の報告や活動状

況、会員の現在数など簡単な報告が行われ、つづいて「釜ヶ崎差別と闘う連絡会議」の西岡智さんから来賓挨拶がありました。西岡さんは、部落差別の闘いと寄せ場差別の闘いのもつ差別の歴史性は違うが、権力による差別分断政策という本質、そしてそれが経済侵略によって、アジアにまで拡大延長されているというその本質を捉えるという視点に立つことで、我々は連帯

寄せ場とアジア人労働者の関係

研究報告は、休憩をはさんで計4つなされました。

1、水野阿修羅（「アジア・フレンド」、日雇労働者）「寄せ場とアジア人労働者」

寄せ場労働者と東南アジア労働者、または出稼ぎ労働者との間の対立の構造は、70年前の日本で行われた、朝鮮人労働者や中国人労働者に対する差別排除の仕方と変わっていない。また当時日本の労働者がアメリカに渡った時に、アメリカ社会の白人労働者によって排除された構造とも似ている。海外労働者が、安い賃金で働き、自分達国内労働者の職場を脅かし、その結果彼らに敵対し、排除するというのは、国家の差別分断政策に乗せられていることになる。また日本資本主義の繁栄といったものが東南アジアの搾取の上に成り立っている現実からみても、個々の労働現場のなかだけの問題としてではなく、より本質的にアジア全体の視点に立つ

しなければならぬ。また、寄せ場研究を通じて自己の主體的立場を確立すること、そして何よりも寄せ場労働者のためになる研究をしていくことこそ社会的にきわめて意義のあることだとし、さらにこれから強まるであろう天皇制国家主義との闘いにも取組んでいけるような研究兄弟組織ができたことを喜んでいる、との熱いアピールをしました。

て、差別の本質をみるという視点に立って、寄せ場とアジア人労働者の問題を考えていかなければならない、などと述べられました。

2、八木正（金沢大学）「国内出稼ぎ労働者と寄せ場」

報告者は、労働社会学の立場から長年出稼ぎ労働者の研究をやってきており、その成果の上に立って、出稼ぎ労働者と寄せ場労働者との接点、共通性に力点をおく発表を行いました。雇用労働の進展過程で恒常的な兼業農家が増大し、特に高度成長期以来、出稼ぎも恒常化してきており、冬型から夏型へ、さらには通年型出稼ぎが現れ、「出稼ぎ」が「日稼ぎ」化している。その結果報告者自身が以前提出した、出稼ぎを「農業を本業とする定住農民がなんらかの理由にもとづく現金収入獲得のために農閑期に生活の本拠地をはなれて成立する労働」とする定義では対応できなくなってきたのではないかと

述べた。また、通年型出稼ぎ労働者層は、農業基盤の喪失、村落内の人間関係の希薄化により、生活の基盤の都市への移行及び賃労働者化し、不安定就労者層へと転化し、さらに、企業にとつて安くて堅実な労働力、「人間消耗品」化している。そしてその一部が日雇労働者層の一部を形成しているのではないかとすれば、そこから日雇労働者と出稼ぎ労働者の連帯の芽と見出すことができるのではないだろうか、という仮説を提示しました。

3、服部良一（西成文化センター）「沖縄出稼ぎ労働者の歴史と現状」

沖縄からのヤマトへの出稼ぎ、また海外への沖縄移民の問題にふれ、歴史的にも日本帝国主義の「満洲」や南西諸島への移民政策の俎上に沖縄人は置かれ、現在でも本土のなかで孤立と差別の状況に追い込まれていることを強調しました。報告者は、本土在住の沖縄人労働者などとともにグループをつくり、しばしば差別と孤立に陥っている彼らの苦境を生きぬくためにともに努力しているひとで、本日の報告はそういった彼の体験と活動にもとづく視点からのものでした。

ここでちょうど到着しました在日本高麗労働者連盟副委員長・金成哲（チン）さんから、来賓挨拶を受けました。そのなかで、金さんは、在日朝鮮人労働者の現状と歴史について多少ともくわしく触れられ、寄せ場と在日朝鮮人との深いかかわりを示唆されました。現在約70万人いるといわれる在日朝鮮人は、その起源が一九一〇年の

朝鮮植民地化にさかのぼること、また在日同胞労働問題研究会の調査によれば在日朝鮮人の就職、就労状況はひじょうに問題を抱えたものであることなどが指摘されました。

4、奥野路介（神戸外国語大学）「ヨーロッパにおける越境労働者の現状」

およそ二〇〇万人といわれる西ドイツを中心としたガスト・アルバイターと呼ばれるトルコやモロッコからの季節労働者もしくは越境労働者の問題に関する報告でした。これらの季節労働者や越境労働者は、経済の高度成長期にはたくさん受け入れられ、また逆に不況になれば追い出されるといった、経済の安全弁的性格をもたされ、さらに密入国で入ってきた労働者は劣悪な労働条件のもとで危険でひどいやがらうな仕事をやらされたり、逆にそのことが、西ドイツ国内の賃金抑制機能をもたらし、ドイツ人労働者を圧迫するといった資本による労働者分断を軸に話されました。問題提起として、農業国から工業国への労働力の移入は「低開発国」への資本投下として、資本の流れと労働力の流れはちやうど逆行しており、以前の植民地主義とは違って相手国を工業化する過程でだぶついた労働力を輸入利用しているのではないか、またそれは新しい形の「経済ファシズム」と言っているのではないかと述べられました。

このあと、日雇全協・山谷争議団メンバーから特別アピールがあり、天皇主義右翼暴力団「金町一家」が山谷の労働センター近くに新事務所を構え、機動隊にまもられながら労働者を襲っ

たり、いやがらせをしたりするといった緊迫した状況が続いている。「金町戦」に勝つことなくしては、運動の前進はありえない。そこで、多くの人が山谷に結集し、特に若い学生に結集してほしい。さらに財政カンパを！という要請が

ヤング・パワーの結集を期待する

初めに、日雇労働者の立場から指紋押捺を拒否して闘っている笹島日雇労働組合の全さんが報告全体に質問を提出しました。まず八木報告に対し、出稼ぎと日雇いとはその生活環境や心理状態さらに社会的背景も大きく違っているという点を指摘し、ついで服部報告に対しても、沖縄人でも大阪の大正区にきている人達と寄せ場の労働者とはこれも違っており、日雇い労働者はあくまでも寄せ場を生活の拠点としている人達であると強調しました。これに対して八木さんは違いのあるのを認めた上で連帯、共通性の基礎を探したいという点に力点があるというふうに述べました。また、最後に全さんから「ひとりの日雇い労働者として、「我々の学会ができた」と受けとめ感激している、これから生きた学会として発展させていきたい」というはげましがありました。

このあとさまざまな質問と応答がなされていきました。そのなかのいくつかを挙げます。厳しいものとしては、学会という対象を素材としてしか扱わない傾向性が強いので、そういうことは寄せ場学会の場合ぜひに避けて頂

なされました。「多くの人の参加と連帯を」以上で夕方5時近くになったので、食事休憩を少々とった後、ただちに第2部としてディスカッションに入っていました。

きたい。そのためにも、金太郎館を排し、フレッシュなヤング・パワーを結集していかなければならない、という尼ヶ崎で演劇活動をしている人からの辛口の注文がありました。また、寄せ場学会としては外国人出稼ぎ労働者における現在のような非合法状態をどう捉えているか、合法化のための運動は考えていないのか、との鋭い切り込みがあったのですが、事務局では今のところまだ協議しておらず合意はないとしか答えられませんでした。それにも関係して何人かのひとから、それにしても都合で来られなかった鶴見良行さんの講演「東南アジア、送り出し側の事情」があれば、もっとテーマに関し突っ込んだ深い議論ができただろうに、残念だ、との声が上がっておりました。奥野さんの「新しいファシズム」概念をめぐっては相当やりとりがあったのですが、双方の側に予断や前提認識の相違などが見られ、煮つもらないままに終わったらしいがありました。

……というふうには仲々議論は尽きず、とうとう午後8時30分を廻ってしまったところで時間切れ終了となりました。

人々のことです。ここでは調査対象者を便宜上「住民」と呼ぶことにします。九月十三日から一週間、山谷地域内の三つの町内会のエリア（旧町丁目エリアに相当する）を対象として行いました。調査は、あらかじめアンケート票を、サンプリングした対象者に送付、留め置きし、調査期間中に調査員が直接に対象者に会って回収するという方法をとりました。結果、若手メンバーの大奮闘が実り、一五八票、約六〇%の回収率でアンケート票が集まり、一応「成功」と言ってもよいと思われま。

この調査では、対象者の生活史や社会的・経済的属性から山谷地域の歴史的特性を浮き彫りにするとともに、社会層・階層ごとの対日雇い労働者・日雇い労働者との関係を明らかにすることを目的としています。アンケート票にはこれらに関する質問項目に加えて、町内会活動や地域の抱え持つ問題などについても幅広く質問項目を設けました。

現在集計作業を進めています。調査中の印象と合わせて、気がついたいくつかの点について述べておきたいと思えます。

①階層的には、全体的には低く、職業としては家内工業（特に皮革関係）など中小零細企業に従事する人が多く、老人の単身世帯や身障者が比較的目立つ地域でもある。こうしたことは、歴史的・社会的背景と結びつけて深く論じられていかねばならないだろう。また、地域住民は、旧来からの住民を中心とした、町内会に積極的に関与する、権力財・関係財により接近可能性の高いグループと、町内会には関与しなかったりあるいは消極的に参加しているグループに二分することができると思われる。いずれにせよ、地域住民を一枚岩として捉えることはできないし、単一のイメージで地域住民を語ることも避けねばならないだろう。

②こうした人々と日雇い労働者との関係は、同一の空間を共に生活の舞台として、ことから考えれば、社会的に距離があり、時にはそれが排他的なものともなっている。その中において、日雇い労働者が顧客となっている場合など経済的合理性を媒介としたつながりも見受けられる。

③山谷という空間が、都市社会の中での日雇い労働者差別を反映し被差別空間化している。その結果、地域住民がさまざまな不利を破ったり（結婚時、就職時における不利、「いやなことと言われる」等々）、人口流出（特に若年層）などの問題が生じ、地域住民と日雇い労働者との関係において差別の再生産が促がされていると考えられる。つまり、日雇い労働者に対する排他的動向に、地域住民が心情的にあるいは主体的に加わっていく素地が作られているのである。下層における階層の細分化と対立、そして下層支配の深化。

集計結果が出て報告ができるのは一九八七年末の予定です。①③で述べたことは、あくまで現在の私見であり、集計作業が進行するにつれ、より詳細に幅広く論じられることになると思えます。

サンプリングの際、一般のアンケート調査と同様に住民台帳からサンプル抽出を行おうとしました。この時、私たちの頭には、地域住民≡住民票記載、日雇い労働者≡住民票に記載なし、という単純な思い込みがあった訳です。ところが実際には、住民台帳にドヤの名とそこに住んでいると考えられる人々（そしてそのおそろくほとんどもは日雇い労働者）の名がズラリ。今から思えば当然のことなのですが、この調査を始めるにあたって、私たちの思い込みを越えた現実の深みを感じさせられた出来事でした。それとともに、山谷という空間を地域住民と共有している、もう一方の人々、すなわち日雇い労働者の

釜ヶ崎

12・25 ↓ 1・10 三角公園。労働センター

前に布団をしく。年末年始は炊きだし。医療の人民パトロール

△釜日労争議団06・632・4273▽

築港

12・13 越冬突入集会。週2回の人民パト

ロール。対福岡市民生局行動、団結越冬大会など1月いっぱい

越冬期間とする

△福日労(準)092・281・0534▽

伝言板

「日本のマイノリティの現状と闘い」

(英文)作成へご協力を

日本のマイノリティの歴史、現状、差別に対する闘い、また行政、法律上の問題を概略

した文献・資料、あるいは今日の問題について詳しい資料(英文・日本文を問わず)

などをお送り下さい。

日本太平洋資料ネットワーク(JPRN)

東京事務所・〒140 東京都品川区東大井1-11

7-609 山本方

TEL 03-474-7247

内的世界と触れ合い、彼らを取り囲む状況を知ることの必要性和重要性を痛感させられました。

今後も、二次的データの収集や聴き取り調査など地域住民調査を続けていきたいと考えますが、それと並行して、日雇い労働者の調査も是非でもやりたいと考えています。ただその調査は、調査者と被調査者の関係を固定しない、もつともつと私たちが日雇い労働者たち双方にとつて実り豊かな「出会い」にならないか、などと思っています。

(都立大学院生)

寄せ場学会第2回総会

4月2日(土)3日(日) 京都大学

記念講演 「京都近代の被差別部落および現代の差別」師岡佑行

☆学会で研究発表希望者は一月末日(第一次)までに事務局へご連絡下さい。
☆学会の詳細は学会通信第3号(88年2月発行)でお知らせします。

日本寄せ場学会機関誌

『寄せ場』創刊号 3月中旬発行

発売 現代書館

〔論文〕

文学と寄せ場——池田浩士

西ヨーロッパにおける移民労働者の現存——加藤晴康

寄せ場学(ヨセバロジー)をめざして——青木秀男

今日の課題としての寄せ場研究——小倉利丸

建築(学)と寄せ場——布野修司

大量失業時代の階級情勢——下田平裕身

アジアからの移民労働者——内海愛子

〔研究ノート〕寄せ場史年表I——松沢哲成

〔調査報告〕山谷調査(一九八七年夏)報告

〔映画〕山岡さんの憶い出——フィルム編集にあたって——川口和子

ほかに、「合評座談会」「現場から」「活動団体紹介」「学会日録」「英文Summary」など。

事務局から

●通信第2号をお届けします。秋には出すつもりだったので、まったく不本意な発行になり申し訳ありません。その原因のひとつに事務局周辺がいろいろなことを兼ねてやっているという現状があります。それをお願いですが、この寄せ場学会の事務や活動などを多少とも「専門的」にやってもらえるようなヤング・パワーはいませんか。ぜひともご協力下さい。

●寄せ場と寄せ場労働者にはいちだんと厳しい冬將軍の到来です。寄せ場学会の会員諸兄姉も各寄せ場で行われる越年・越冬闘争に参加され、実体験されるよう訴えます。もちろん物資(米、肉、野菜などの食糧品や男物の衣類、とくにオーバー類、または寝具、毛布その他)やお金などのカンパも結構です。問い合わせは、早目に事務局・松沢、西日本事務局・島(高槻市日向町7-15 TEL 0726-762549)の方にどうぞ。

●会員名簿完成のため、同封のハガキをご返送下さい。